



特集論文 人口減少社会を見据えた県立高校の「魅力づくり」に関する研究：地域との連携による高校改革に着目して

著者	小粥 俊輔
雑誌名	日本高校教育学会年報
巻	24
ページ	4-13
発行年	2017
URL	http://hdl.handle.net/2241/00150413

人口減少社会を見据えた県立高校の「魅力づくり」に関する研究

—地域との連携による高校改革に着目して—

静岡県立浜松南高等学校 小粥俊輔

【キーワード】人口減少，再編整備，存続，魅力，地域連携

1 問題の所在

2015年の国勢調査において日本の人口は調査開始（1920年）以来初めて減少し1億2709万5千人となった。地域差を伴った人口減少の要因は少子化と人口移動である。年間出生数は1973年の209.2万人（第2次ベビーブーム）をピークに減少し2015年に108万人となり，2060年には48万人になるともいわれている。人口移動に着目した吉田（2011）は，高度経済成長期は若者が人口過剰の農村から労働力不足の都市へ移動し人口過剰・過少問題が解決したが，これが今日も続いている⁽¹⁾と述べている。現代は少子化と人口移動を特徴に持つ人口減少社会であるといえよう。

表1. 年齢階級別の労働力人口推移と見通し

（2006年厚生労働白書より筆者作成）

年齢	実績値			推計値（万人）		
	1995年	2000年	2005年	2015年	2020年	2030年
総数	6,666	6,766	6,650	6,535	6,411	6,109
15～29	1,603	1,588	1,355	1,170	1,140	1,100

表2. 年齢階級別の労働力人口推移と見通し

（2016年厚生労働白書より筆者作成）

年齢	実績値			推計値（万人）		
	2015年	2020年	2030年	2015年	2020年	2030年
総数	6,598	6,589	6,362	6,598	6,589	6,362
15～29	1,093	1,073	1,027	1,093	1,073	1,027

阿藤（2007）は人口減少が経済成長に不利に働く理由を「労働力人口の減少」や「労働力人口の年齢構造変化」等にまとめている⁽²⁾。表1・2は労働力人口の推移と見通し（2006年・2016年）で，その総数は2000年を境に減少している。また，両表の2015年15～29歳労働力人口には80万人程の差があり2020年以降の推計値は70万人程下方修正され，10年前のそれよりも減少が加速しており，現代の子供達は顕著な労働力人口減少という未経験な状況を迎えるといえる。波多江・川上（2014）は，小峰ら（2007・2010）の労働力一人当たりの生産性を引き上げる等の検討が必要との見解に触れ，これは子供に提供する教育内容とも関わっている⁽³⁾と述べており，人口減少が学校にも影響を及ぼしているといえる。川上（2015）は多くの地域で直面している学校の小規模化への対応は，機能維持のための規模を求めた統廃合推進と小規模化に対応できる学校機能の再検討である⁽⁴⁾と述べており，これからの社会を支える人材育成の場である学校は，その役割を再検討する必要があると考える。溝上（2015）はキャシー・デビットソンの「2011年にアメリカの小学校に入学した子供たちの65%は大学卒業後，今は存在していない職業に就く」との予想に驚き，「若者達には変化の激しい時代だからこそ自分の頭で考え自ら進んで行動し，社会の変化に適應してタフに生きていくことが求められている」⁽⁵⁾と課題提起している。現代の子供達は変化の激しい社会に適應する能力を身に付ける必要があり，学校がその大きな役割を担っている。昨今の高校は進学率が98%を超え，義務教育といっても過言ではない。過去に増加した高校は2000年頃から統廃合が進んでおり，特に人口規模が小さくその減少が課題である地域において，市町村内に県立高校が1校しか存在しない場合⁽⁶⁾，学力や進路希望等，多様な生徒が入学していると推

測される。そのような現代において、高校は地域との繋がりを意識しながら、社会を支える人材を育成する場としての「魅力づくり」を問い直す必要があると考える。

2 研究の目的と課題・方法

(1) 本研究の目的 人口減少地域において地域との連携によって行われている県立 K 高校の事例から「魅力づくり」の実際を明らかにし、人口減少社会を見据えた県立高校の在り方を考察する。

(2) 研究の課題・方法 本研究の目的を達成するため、以下の研究課題・方法を設定した。

【課題1】生徒数に見る県立高校の変遷や人口減少社会を見据えた高校改革の事例等を基に現代社会に必要な力を踏まえ、先行研究等から本研究における県立高校の「魅力づくり」を定める。

【課題2】K 高校の「魅力づくり」の観察、インタビュー調査から導入と実施の過程を解明する。

【課題3】インタビュー調査から K 高校の実践が教師・生徒・地域に与えた影響を明らかにする。

【課題4】上記の結果から、これからの県立高校の在り方を検討する。

〈観察調査〉K 高校の「魅力づくり」の要素である「K の郷『夢』プロジェクト」(略称「ゆめぶろ」)事業の「お茶実習」と「春季『夢』講演会」を観察する。

〈対 象 者〉管理職(前校長、現校長、前副校長、現副校長)、教諭(T1~T6)、地元生(S1~S6)、K 留學生(S7~S12)、保護者(P1~P6)、地域住民(C1~C5)の計33名。

3 人口減少に焦点を当てた県立高校の「魅力づくり」

(1) 生徒数から見る県立高校の変遷 1950年に67万人であった高校進学者数は1960年代に170万人近くまで増加した。その要因は出生数の増加(第1次ベビーブーム)と高校進学率の上昇と考えられる。1950年に42.5%であった進学率は1965年には70%を突破した。それは国民総生産が世界2位(1968年)となる程の高度経済成長が関係し、その要因である産業構造の変化に見合う労働力確保に応じる機能が学校教育に求められた。この変化は家業を継ぐという概念を変え、1955年からの10年間で高校生数は2倍近くになった(図1)。しかし、それに対して高校数は横ばいであり、1校当たりの生徒数が増加したといえる。香川ら(2014)も当時の初等中等教育局長の国会答弁から「文部省は第1次ベビーブーマーが入学する2年前から1割程度の『すし詰め』で27万人、1割程度の学級数増で27万人(中略)の

収容増を公立高校全体で見据えていた」⁽⁷⁾と明らかにした。1990年の高校生数は前回のピークを上回り、高校数は3,633校(1965年)から4,177校(1990年)に増加した。その後高校生数は減少し、2000年付近まで横ばいであった高校数は2005年以降減少に転じている。屋敷(2014)は「生徒減少に伴い全国一律に再編整備が進んでいるのではなく、その進行には都道府県によりかなりの違いがある」⁽⁸⁾と述べている。

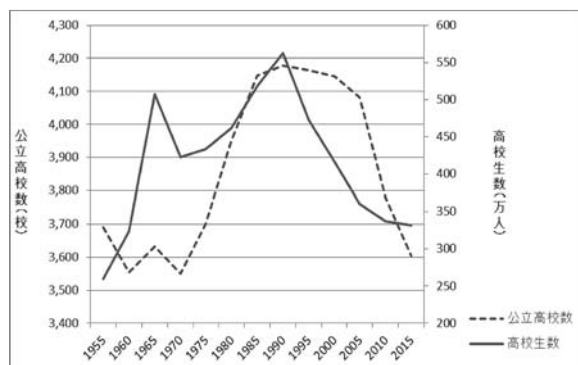


図1. 公立高校数と高校生数
(「文部科学省統計要覧」(2016)より筆者作成)

(2) 全国的な広がりを見せる人口減少社会を見据えた高校改革 先進事例として、海士町にある島根県立隠岐島前高校⁽⁹⁾が有名である。高校と地域の存続は直結するという人口減少地域特有の状況下、2003年に町は高校存続を盛り込んだ「自立促進プラン」を完成させ、同プランの企画で島にきた岩本氏が「高校魅力化コーディネーター」として島前高校の「魅力化」を導いている。彼が初めて「魅力化」という言葉に出会ったのは、後援会の新しい名称「隠岐島前高等学校の魅力化と永遠の発展の会」を見た時である。存続という言葉に違和感を持っていた岩本氏は「魅力化とは生徒にとって『行きたい』、保護者にとって『行かせたい』、地域住民にとって『活かしたい』、教員にとって『赴任したい』と思う魅力ある学校になることであって、その結果として存続がついてくる」と感じた。その後、彼を中心とした魅力化チームが島前高校魅力化構想を完成させ、2009年度の「ヒトツナギ」を皮切りに2010年度には「島留学」や「夢探究」を開始した。入学者の増加により2012年度には2学級化(2006年度から1学級)を実現し、存続の危機にあった島前高校は生徒数のV字回復を見せた。これは、既存の画一的な教育からの転換という意味でも最先端な教育であるといえ、この動きは各地に広がっている。現在、全日制公立高校97校が(内31校が2016年度から)全国募集をしており、中学生は地元以外に97校の進学先があるともいえる。例えば長野県白馬高校が国際観光科40名を新設する等、「魅力」を冠する取組を全て取り上げるのが困難な程、同様の改革は広がっており、その共通点は都道府県教育委員会の関与である。

(3) 人口減少に焦点を当てた県立高校の「魅力づくり」 「魅力」に近い概念として、「他よりすぐれて目立つ点」を意味する「特色」があり、高校教育では1978年改訂の学習指導要領基本指針に「特色ある学校づくり」が打ち出された。飯田(2000)は全国の特徴ある学科・コースの調査から、「特色化」の主な理由を「生徒の興味・関心、社会からの要求の変化への対応」とし、その基軸を「職業社会への対応」「生徒の興味・関心への対応」「進学要求への対応」「新規性の強調」の4点に分類した⁽¹⁰⁾。高校の「特色化」は1980年代の進学率上昇等による生徒の多様化や高校数の増加から、社会や生徒の要求に応える選択肢を増やす色が強かったと思われる。しかし現代の高校は再編整備が進み、特に著しい人口減少地域の県立高校は生徒数が減少し、学級や教師の削減による授業や部活動等の質の低下が生徒減少を加速させ、存続の危機を招いている。昨今、様々な教育現場で「人の心をひきつけ夢中にさせる力」を意味する「魅力」が用いられている。管見の限りの初見は島前高校であり、文部科学白書(2008)にも「それぞれの特色を生かし創意工夫に富んだ魅力ある学校づくりが進められています」と掲載されている。近年各地の都道府県教育委員会でも多くが「魅力」と「特色」を併用しており、現代は以前から謳われていた「特色」の強調だけでは立ち行かなくなり、人口減少社会を見据えた高校教育の在り方を検討しているといえよう。また、これからの社会を支える人材の育成という視点で「現代の社会に必要な力」として様々な資質・能力が検討されているが、本研究では次の①～④を「現代の社会に必要な力」とする。①自己や現代の社会を適切に捉える力②課題から問いを立てる力③解決のために他者と協働し実践する力④それらから将来を見据える力。また、高校は生徒のためにあり、その成長が保護者、教師、地域住民にとっての「魅力」になるとの考えより、高校の「魅力」を主に生徒にとってのものとする。次に、高校の考える「特色」も受け手によっては「魅力」とはならず、生徒の受け取り方に依拠している点に留意する。「魅力」は高校の「特色」を活かし、生徒の心をひきつけ成長させる点が重要であると強調したい。また、高校は社会を支える人材育成の場として、生徒に

「現代の社会に必要な力」を身に付けさせる必要があることを疑う余地はない。

以上を鑑み、本研究における「魅力づくり」を次のように定義する。まずは、「魅力」を「高校の持つ特色を活かし、生徒の心をひきつけるもの」とする。その目的は「現代の社会に必要な力の観点で生徒が成長すること」である。また、人口減少社会の先進地域に多い小規模県立高校は、教育資源の拡大として設置者の枠を越えた地域との連携に重きを置いている点を踏まえ、本研究のテーマである、人口減少社会を見据えた県立高校の「魅力づくり」を「人口減少社会の先進地域における県立高校と地域の連携に着目し、県立高校が『魅力』をつくること」とする。

4 K 高校における「魅力づくり」の導入と実施のプロセス

(1) K 高校が置かれていた危機的状況 X 県北部(北は県境)に位置する K 町は、お茶や林業が主な産業で、南の S 市から続く川沿い約 60km の鉄道が貴重な観光資源である。1960 年代に 1.7 万人程であった人口は 2016 年現在 7,333 人で、人口の減少や流出による産業従事者の高齢化や担い手不足が問題となっている。その町唯一の K 高校は 1963 年に定員 150 名で開校した全日制普通科で、卒業生約 6,900 名を送り出している。創立 50 周年記念式(2012 年度)で同窓会長は「本校は地域の活力源として必要不可欠です。いつまでもこの地域に存続するよう、ますますの発展を願います」と挨拶した。2016 年度の全生徒数は 150 名で、前年度卒業生の進路は大学・専門学校進学、公務員、就職と多様である。全員加入の部活動は全て週 5 日以上活動しており、夏期休業中も補習や進路指導等と合わせ多くの生徒が登校していた。また、K 高校は 2002 年度から「交流授業」と「生徒交流」を柱とした県内初の連携型中高一貫教育を地元 3 中学校と行っており、進学への安心感が高まったが、進学率(連携前 8 年間平均 54.8%, 連携後 12 年間平均 46.9%)の上昇は見られない。近年の入学人数は定員割れが続き、2014 年度に危機的状況の 40 名(定員 80 名)となった。この年こそ本研究が着目する K 高校の転換期で、その後の 2 年間は入学人数が緩やかに増加している。その鍵を握るのが、2012 年度に赴任した前校長導入の「K 留学」である。

(2) 「K 留学」の導入と実施のプロセス 「K 留学生」は町の条例で連携中学校以外の出身者と定義され 3 年生 2 名、2 年生 10 名、1 年生 22 名である。町は 2014 年度に A 寮(定員 7 名)、2016 年度に若者交流センターとして B 寮(定員 35 名)を新設した。現在の居住状況は A 寮 7 名、B 寮 22 名、下宿 3 名、自宅 2 名で、下宿については B 寮完成後も生徒本人の希望で継続され、自宅通学生は S 市から鉄道等を利用している。「K 留学」は創立 50 周年記念式後、前校長が町長、議長、町教育長らの協力を得た所から始まっている。前校長は県教育委員会等で様々な再編整備に関わり、学校がなくなることや生徒が減る影響を様々な部分で感じていた。彼は赴任当時の印象を「このまま人数が減ったらどうなるかとの思いがあった。じっくり教育ができる学校がなくなったら寂しい。同窓会長と事務局長が熱心でよく来校し、心配され『頼むよ』といわれていた」と語っている。前校長の経歴や地域住民の思いを汲み取る人間性、自身の教育観が「K 留学」の出発点であるといえる。しかし、彼は「K 留学」について「職員会議でいった覚えはない」と述べており、「K 留学」は教師達に突然伝えられた決定事項であった。一見、前校長の独断による「K 留学」が、実現に至った背景は次の 4 点だと考える。①町(行政)の理解 町は寮や下宿補助等を支援している。町教委管理主事 C1 は「町以外の子供達になぜそんなお金を掛けるんだという意識がないわけではないが、町唯一の高校がなくなったら町はどうなるかと考えると外せない」と語った。

②地域住民の人柄 C4は、K高校は卒業生である自分達にとって本当に大事な学校だと語り、下宿を受け入れた経緯を「K高を存続させるために(下宿先を)教育長さんが探していて、色々考えて受け入れたんです」と語る様子にも優しい人柄が滲み出ている。ある家庭が山間地等で通学困難な町内の生徒を下宿させていた事実も、受け入れの抵抗を緩和させていた。また、K町は観光が盛んで外の人間を快く受け入れる素地があったとも考えられる。③前副校長の存在 前校長が「K留学」実現に「前副校長がよく動いてくれた」と語り、彼自身も「副校長は校長の思いを具現化するためにはどうしたら良いかっていう動きをした」と語っている。④柔軟な対応力を持ち、意欲の高い教師集団 全教師が「K留学」を知った経緯を覚えていない等と答えた違和感を前副校長に伝え、彼は「殆どが他校なら中核となるぐらい吸収力のある先生達が多かった。(中略)まずは動いてみようっていう貪欲さが彼らにはあって」と答え、前校長は「ここの課題は生徒の減少であることは常々伝えていた」と語り、危機意識が教師達に醸成されていたと考えられる。またT1は導入を「(具体像が見えない不安はあったが)ありがたい話だった」と述べている。このように、本質を意識的に伝えていた前校長、日頃の教育活動で教師間を繋ぐ要であった前副校長やT1の存在等から意欲的な教師集団ができあがり、スムーズな導入が実現されたといえよう。

(3)「ゆめぶろ」の導入と実施のプロセス 「ゆめぶろ」は「Kを想い、Kの未来を創る人を育てる」を目的としたK高校魅力化の総称である。「K留学」2年目の2015年度に赴任した現校長は生徒の生活環境整備を進めながら、「特色化については我々がやらなければいけない。そこで、中のこれからをどうすべきかは赴任してすぐに考え始めた。数年後を考え特色化や魅力化づくりに早速動かなければ」と当時を語っている。前校長トップダウンの「K留学」に対し「ゆめぶろ」は現校長が復活させた企画委員会と校内研修の積み重ねで導入された。両者の導入方法は対照的で、現校長は組織づくりを「納得がキーワードで、そのためには関わらせること。時間が掛かっても良いから職員に考えさせ知恵を出させ工夫させ形を作る。そうすると動き始めた後が上手くいくのではないかと期待している」と研修に拘った様子を語った。しかし、現在は事業の実施と検討が行われている段階であり、生徒の「ゆめぶろ」に対する認識は曖昧で教師間でも不明確だった。そこで、本研究では「ゆめぶろ」を年間事業の総称とし、「ゆめぶろ」と「K留学」それぞれを「魅力づくり」の要素であるとする。「ゆめぶろ」の大きな柱は総合的な学習の時間を用いた7事業(集団宿泊研修、お茶実習、Kの郷「夢」講演会、未来創造プロジェクト、保育実習、Kの郷の夢を語る会、Kの郷エコパークツアー)と、若者交流センター(B寮)における学習支援である。

5 K高校の実践が教師・生徒・地域に与えた影響

(1)教師の抱える葛藤 K高校教職員組織は特殊であり、それは教頭が不在な点(県内全日制課程唯一)と県内最少の職員数21名(県平均51名)な点、そしてその「若さ」である。筆者が見かけた限り県平均(43.8歳)以上に見えたのは僅かであり、自分のことで精一杯な若い教師達が多いと表現した前校長は「先生達には生徒を一生懸命見てもらいたい。後の方針は管理職が動くから」と語り「職員会議は(最初から)皆でやれば良い」と企画委員会を実施しなかった。当時の管理職は校長が副校長も兼ね、副校長が教頭と課長のように教師達を直接動かすしかないと認識していた。前副校長は、現副校長に上が動かなきゃ動かない組織になったと怒られたと振り返りつつも、「K高校で組織的にというのは難しく現副校長も1年ぐらいいたら気づくのでは」と語った。現校長

赴任時の組織は「なべぶた型」⁽¹¹⁾で、彼の理想とする組織はミドルリーダーの課長が業務を掌握し職員育成の意識を持つことであった。ここに、管理職の組織づくりにおける理想と現実の葛藤が存在すると考える。前管理職の組織づくりは教師の経験という課題は残るが既にある良さを活かしており、現管理職が目指す組織づくりの狭間で葛藤を抱える教師の存在は否定できない。

「K留学」も教師達に影響を与えた。2014年度の制度1年目はその準備が慌ただしく進められた点が鮮明に記憶されているが、すぐに馴染んだ留学生2名による教師への影響は見られなかった。教師達は制度2年目の新留学生10名と地元生のバランスが程良いと感じており、学年主任のT3は「今までにない出会い」と「目的意識の高い留学生の存在」が地元生に良い影響を与えていると述べたが、他の教師がこの学年に触れることは少なかった。3年目は全学年に留学生在籍が叶ったが、22名の新留学生に対しては成育環境の違いによる気質の多様性等、様々な声を聞いた。現校長は、今までは全新生の入学前の状況を知り得たが1年生の3分の1は不明な上、情報が入りにくいと言っている。3年生担任のT5は1年生の挨拶の変化を気に掛け、養護教諭のT6は保健室での生徒の質の変化を感じている。複数の教師は今までの指導が立ち行かず、地元生が留学生に引き寄せられてしまう危機感を持っている。この、今まで通りが通用しない状態と存続の危機を救う「K留学」の存在が教師の葛藤であるといえよう。しかし、「K留学」を生徒の成長に活かせるとの考えや、地元生の良さと留学生の積極性等を合わせたいと語る声もあった。

また、前年度から実施された「ゆめぶろ」の一部は今年度も当然のように流れているが、ここに教師達の認識のぶれという危険性が含まれていると考える。ただし、現校長は目指す生徒像を明確に謳っている点を強調し、そこはぶれずに教育活動を行う決意を表した。しかし、教師の多忙化を危惧する声も聞かれ、「ゆめぶろ」は現実的な妥当点を模索しているといえよう。

これから、K高校の「魅力づくり」は2016年度を境に教師への影響が変化しており、本研究では2014・15年度を「魅力づくり第Ⅰ期」、2016年度を「魅力づくり第Ⅱ期」と定める。

(2) 生徒の成長 調査した留学生10名はK高校より大規模な中学校出身で、態度の悪さや遅刻の多さ等、消極的に送っていた学校生活を変える機会を探していた。入学理由は部活動等の前向きな目的とそうでない者がおり、多くは後者であったが親元を離れてまで自分を変えたいとの覚悟があり、後者からの脱出を試みたのではないだろうか。彼らは教師の丁寧な指導や在校生の礼儀正しさ等の人柄、人の多さが苦手な生徒は少人数授業やチューター⁽¹²⁾制に惹かれ入学している。入学後の留学生は、学校生活では授業・勉強に対する姿勢や時間・約束を守る等、当たり前のことが身に付き、K高校には誠実に臨む雰囲気満たされていたといえる。ある生徒は人数の少なさからクラス全員と話す機会ができ、今までは先入観で相手を見ていたと気づいている。寮生活等では「自立」「計画的な行動」「親への感謝」「自己理解」が確認された。親元を離れた共同生活で、それまでの環境や親との関係を客観的に捉え自分を見つめ直す機会を得られた結果といえる。成長を実感したある留学生は「将来は教師としてK高校の教壇に立ちたい」と夢を語っている。

また、地元生が留学生に感じ取った点を整理すると次のようになる。授業中に平気で寝る等、留学生の態度に驚いた部分もあるが、「社会に出れば色々な人がいることを知る良い機会となった」等、今まで狭く固定化された関係の中で生活してきたと改めて気付くと共に、わからない所は積極的に先生に聞くようになった等、留学生の積極性が良い影響を及ぼしていた。部活動については技術や意識の高いライバルが増え活性化に繋がったとの声が多かった。これから、留学

生の存在により校内の雰囲気は明らかに変化しているといえるが、善し悪しの判断が身に付いている地元生は、良い点は見習い悪い点には流されないと考えられるのではないだろうか。

「ゆめぶろ」により「地域に目を向ける」点に成果が見られ、講演会の感想として今までは考えたことのなかった地域貢献を自分でも何かできるかも知れないや、過疎地域の自然を活かすために尽力された元町長さんに刺激を受けた等、前向きな声を聞いた。しかし、卒業後に地元に残りたい生徒は少なく、生徒は地域の課題に目を向けられたが行動には至っていないと考えられる。

(3) 地域にとってのK高校の存在 K町は2015年に地域や小規模校の良さを活かすため学校教育ビジョンを打ち出し、K高校を町の教育キャリアの最上位として通学や講演会、海外短期留学英語研修の支援、B寮の建設・運営を行っている。7千人余りの町が教育委員会に管理主事を置き、B寮建設に約2億2千万円もの予算を組んだK町は教育に力を注いでいるといえよう。また、卒業生で野球部保護者であるC2は「高校がなくなると寂しいし、野球部も強くはないけど地元の方はすごく応援してくれる」と語り、購買担当のC5はそれを引き受けた経緯を「OBですし、応援したいという気持ちもありました」と述べた。K高校は地域にとっての「心」や、自分達が田舎者であると悲観的に捉えていた感覚を変えてくれたとの声も聞いた。さらに、K高校の教育の良さに触れ「K高校がすごく魅力ある教育をやってくださるから町が応援する」と、K高校の必要性を訴える声もあった。これら地域住民のK高校への愛着や信頼が存続への思いに繋がった点は明らかだが、彼らは現状を手放しで喜んでいるわけではない。C3は、挨拶をしない生徒が増えた変化を述べ、その影響を「挨拶は基本で人を変える力もあると思うので、これが続かなくなるとね。皆K高校のことを応援していて、金銭面でも寄付金とか出してくれているし文化祭も行くんです」と語り、高校と地域の距離が離れることを危惧している。また、地域住民が校内の様子を知らない状況をC5は、K高校の実際を「進路実績を横断幕等で地域住民に見せる」「学校便りに身近な情報、例えば野球部のメンバー表や選手の特徴等を載せる」等でアピールすべきだと熱く語り、K高校を身近に感じる事が応援の熱に繋がることを期待している。C2はK高校を応援する人が外にもできた点に喜び、C3は下宿生が「ここが第2の故郷」だといった例えから「ここで学んで育ってくれたら、いつか帰ってきてくれるんじゃないか」と期待している。さらに、地域住民は「K留学」による活性化が地元生の増加に繋がって欲しいとの思いを持っている。

6 これからの県立高校の在り方

(1) K高校における地域との連携 K高校と地域の連携には次の特徴がある。1つ目はK高校の連携が「高校から地域」という点、2つ目はコーディネーターの所属の違いで、K高校は教師であり島前高校は連携を専任とするIターン者の岩本氏である。そして3つ目は人事や募集定員、新学科の設置が可能となる県教育委員会の関与の有無である。島前高校や白馬高校は町や村発で、多くは「地域から県教育委員会を巻き込んだ高校への連携」といえ、この違いによるK高校の利点は即効性で、「K留学」は前校長決断の約1年半後に実現した。島前高校は動き始めの5年後、白馬高校は23年後に具現化しており、地域が県立高校に働きかける難しさを示唆している。

ここで、働きかけの方向について、お茶実習に見るK高校と地域との連携について考察を加える。お茶実習は昨年度から再開された事業で、2人の教師が卒業生を通じて町の産業課に依頼し、お茶の昨今の状況下で若者へのアプローチが重要と考えていた町の全面的な支援で実施された。

町主導で農林業センターでのお茶摘みと事後指導講座2回が行われ、生徒は学んだ淹れ方を活かし、自らが摘んだ茶葉を文化祭で呈茶した。しかし2年目の2016年度は学校主導のお茶摘み、道の駅訪問、事後作文指導へと変化した。その理由を教師達は産業課への依頼が断られたと認識しているが、各担当の語りから状況を整理すると、産業課の担当者は、「何か相談があれば乗るけど、今年は高校で段取りしてください」との意図だったようだ。ここに、学校から地域への親密なコミュニケーションの難しさが潜んでいる。仮にコーディネーターが町所属であれば産業課の意図を汲み取ることができたであろう。さらに教師は同学年に留まらず、依頼と実施を別の担当が行う場合が多く、しかも2年目は「再開」が「継続」に変わる初年度であり、「前年度踏襲」や「例年通り」という危険性が潜んでいるのではないだろうか。これらを鑑みると高校と地域の連携では長期に渡り両者が信頼関係を築き、改革に専念できる環境づくりが必要であるといえよう。

(2) K 高校における「魅力づくり」 まず、留学生数増加の背景は次の5点であると考え。1つ目は留学生の生活環境が整った点で、2つ目はその存在が知れ渡った点である。中学校訪問の効果が高いが、SNS等の発達でその名はさらに広がるであろう。3つ目は潜在的ニーズの存在で、留学生の一部は適正規模とされる中学校で何となく生活していた自分を変えたいと考え、ある保護者は子供の自立や親子関係の改善を願って進学させた。4つ目は少人数を活かした教育活動で、教師一人あたりの生徒数が他校の3分の1程度で、1人の生徒を3倍近く見られる環境や、生徒が感謝する教師の熱意や手厚い指導である。5つ目は地元生の人柄で、連携3中学校の違い(A・B中学校はK町立、C中学校はS市立)により幼少から関わりがあったA・B中学校出身者を純粋な地元生と仮定すると、K高校生は以前から他(C中学校出身者)を受け入れて高校生活を開始していたといえる。高校の存続という意味で「K留学」は成功しているが、単純計算で募集定員80名に対し地元生が30名程と仮定すると約50名の留学生が入学可能となり、「町立K高校」と例えられ前校長が語った「今ときにはない、じっくり教育ができる学校」から遠ざかることは想像に難くない。しかも、高校との距離が離れた地域住民は寮の不足分を補うための下宿受け入れを拒む可能性が高まるだろう。これが現実となれば、学校裁量と町との連携のみでは限界があるといわざるを得ない。さらに留学生数増加が加速すれば、「気軽さ」の上昇により留学生の「覚悟」の低下が危惧され、「K高校らしさ」を失う負の循環に陥る未来を完全に否定することは難しい。

ここで改めて「魅力づくり」という言葉に着目すると、ないものをつくり出すと捉えられるが、前校長が既に存在する「魅力」存続のために「K留学」を始めた点は明らかである。例えばK高校は1学級平均17名で習熟度別授業も行う、まさに手厚い指導で全職員が全生徒を指導しようとする意識も醸成されている。また、多くの生徒や保護者は3年生に対するチューター制度や部活動を価値あるものと語った。このように、高校が本来持っている「魅力」を本研究では「既存の魅力」とする。また、生徒が望んでいた「手厚い指導」「チューター制度」「部活動」「だらしのない自分を変える」「自立」等の「魅力」を「生徒が望む魅力」とする。K高校の「魅力づくり第Ⅰ期」は「既存の魅力」を活かすために導入され、地元生と留学生の程良いバランスにより今までのK高校らしさが継続されており、「生徒が望む魅力」も実現できていたと考える。ここで、第Ⅰ期の生徒の「現代の社会に必要な力」について、地元生は自分達の当たり前が通用しない場合があることを学び、留学生は自己を理解し自分を変える覚悟で入学しており、①の「自己を適切に捉える力」は身に付いたといえる。さらに、互いの違いを知ることで「他者を適切に捉える」機会は

増えたといえる。ただし、「現代の社会」を適切に捉えられたかの判断は難しい。次に②「課題から問いを立てる力」、③「解決のために他者と協働し実践する力」について、留学生は寮生活で新たなルールを決めたり翌日を予測して行動できるようになり、親に依存していた彼らに②③の力が身に付いたといえよう。学校生活では全ての生徒に役割が与えられ、そこに自治が成り立っている点において②③の力が身に付く可能性は十分に考えられるが、その多くは校内で完結している段階であるといわざるを得ない。④「それらから将来を見据える力」についてはチューター制度の存在が大きいが、「小さい頃からのコミュニティでしか生きてなくて卒業して外に出ると続かない子が多い」と語られるように、①～③で限られた環境で育ってきた課題があるといえる。「魅力づくり第Ⅰ期」は今までのK高校らしさという「既存の魅力」を活かし「生徒の望む魅力」を満たしていたといえるが、現校長が「主体性が足りない」、教師達が「お人好し」「勝負所で行かない」「覇気がない」等と表現する「現代の社会に必要な力」や「将来を見据える力」の向上を目指して「魅力づくり第Ⅱ期」の「ゆめぶろ」が導かれている。これは今までのK高校になかった「魅力」であり、「現代の社会に必要な力」の育成を目指している。そこで本研究では「既存の魅力」に対して「目指す魅力」とする。また、現校長の語る主体性とは、これからの社会を生きる生徒に身に付けてもらいたい力(見つけてもらいたい魅力)であり、本研究における「魅力」の主体は生徒であることから、その「魅力」を生徒の視点で「見つける魅力」とする。新興期である「ゆめぶろ」の成果の検証は難しいが、①は生徒が地域に目を向ける機会が増え第Ⅰ期よりも成果を上げているといえ、②～④については今後に期待したい。このように「魅力づくり第Ⅱ期」は第Ⅰ期の「既存の魅力」を活かし、課題克服のため「目指す魅力」を導入し、「生徒が見つける魅力」に向かっていと考えられる。つまり、図2のように、第Ⅰ期は「既存の魅力」によって「生徒が望む魅力」が満たされていたが、生徒の「主体性」等の課題を克服するため「魅力づくり」は第Ⅱ期へ進んでいるといえよう。このステップアップと捉えられる変化には「既存の魅力」の衰退という危険性が潜んでいると考える。今まで以上の教育の実現には地域との連携のため

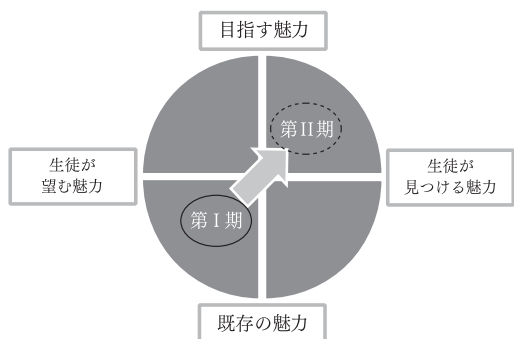


図2. 「魅力づくり第Ⅰ期」「魅力づくり第Ⅱ期」の位置付け

の事前準備等の時間が必要となり、留学生の増加から今までの指導が通用しない事態による生徒指導増加も想定される。これらは教師が生徒を見る時間という「既存の魅力」を衰退させてしまう可能性を含んでいる。しかもK高校の指導は各教師の力量によって支えられており、現副校長が「批判的な視点も持たないと本質を見失ってしまう可能性がある」と語るように、共通の方向性を失った場合の危険性や、個人の能力を超えた事態への対応の困難さも懸念される。

(3) K高校の事例から見る再編整備の在り方 K高校の事例から、筆者は高校の存在意義(価値)を生徒数や学級数のみで図ることは不適切であると考え。現在の再編対象の多くは整備しやすく財政面等の効果が高い小規模校で行われ、富山県では2009年に16校あった1学年3学級以下の高校が翌年に8校と半減した。この評価として、長年の課題であった高校再編が実現し成果が現

れている一方で地域に愛された学校が募集を行わなくなったという痛みも伴ったが、それを補って余りあると述べられている。この「余り」とは何を評価しているのだろうか。屋敷(2014)は「小規模校の場合には地域事情を可能な限り考慮し、以前よりも統合を抑制する方向にある」と述べている。山形県では、1学年2学級の学校の入学者数が2年連続定員の3分の2未満の場合はその翌年度から定員を1学級にし、2年後に分校にすると定められているが、適用に当たっては学科等の特殊性や地域の実情に十分に配慮するとされている。また、県立高校は単に教育の場でなく、地方自治体の地域計画の領域であると捉える必要性や「人」の思いを見過ごすこともできない。再編整備は各高校が持つ「魅力」を十分に考慮し、広い視野に立つ必要があると考える。

(4) これからの県立高校の在り方 K高校には「既存の魅力」が存在し「生徒が望む魅力」を満たした状態が第Ⅰ期で、第Ⅱ期は課題を乗り越えるため「目指す魅力」を取り入れ「生徒が見つける魅力」へ導こうとしていると捉えた。また、「魅力づくり」は図2の縦軸上の「既存の魅力」から「目指す魅力」への動きに、横軸上の「生徒が望む魅力」や「生徒が見つける魅力」が影響されると考える。K高校はいずれ「K留学」の安定と「ゆめぶろ」の充実で、現在の「目指す魅力」が「既存の魅力」となり、新たな「目指す魅力」が生まれるであろう。同じく、全ての高校には「既存の魅力」が存在し「目指す魅力」がつくられる、またそれをつくるべきであるといえよう。つまり、「魅力づくり」は「既存の魅力」から「目指す魅力」をつくり、それが「既存の魅力」へ変化することの繰り返しであり、常に課題を見つけ変化を続ける必要があることを意味している。また、その影響を受ける「生徒が望む魅力」や「生徒が見つける魅力」を見誤れば、本当の「魅力」とは程遠いものになってしまう。しかも県立高校は、それぞれの役割に応じて再編整備や地域との関わり等、単独では捉えきれない課題を有しており、そのような「魅力づくり」に携わる教師自身が、生徒と共に「現代の社会に必要な力」を身に付けるべきであるといえよう。

【注】

- (1) 吉田良生(2011)「過疎化のゆくえ」、宮本みち子編著『人口減少社会のライフスタイル』放送大学教育振興会、pp.200-219.
- (2) 阿藤誠(2007)「人口減少と社会変動」、阿藤誠・津谷典子編著『人口減少時代の日本社会』原書房、pp.1-30.
- (3) 波多江俊介・川上泰彦(2014)「人口減少社会における日本の教育経営課題」、日本教育経営学会紀要第56号、pp.158-163.
- (4) 川上泰彦(2015)「地方教育委員会の学校維持・統廃合判断に関する経営課題」、日本教育経営学会紀要第57号、pp.186-192.
- (5) 溝上慎一(2015)『どんな高校生が大学、社会で成長するのか』学事出版
- (6) 全国の公立高校約3600校のうち、市町村内に1校しか存在しない高校は303校(筆者調べ)であり、そのうち200の市町村は人口が3万人未満であった。さらに、1万人未満の市町村は87と、全体の29%を占めている。
- (7) 香川めい・児玉英靖・相澤真一(2014)『〈高卒当然社会〉の戦後史 誰でも高校に通える社会は維持できるのか』新曜社
- (8) 屋敷和佳他(2014)「高等学校教育改革の現段階の到達点と課題に関する調査研究」、研究代表者：杉野剛『高等学校政策全般の検証に基づく高等学校に関する総合的研究〈報告書〉』国立教育政策研究所、pp.3-361.
- (9) 山内道雄・岩本悠・田中輝美著(2015)『未来を変えた島の学校隠岐島前発ふるさと再興への挑戦』岩波書店
- (10) 飯田浩之(2000)「高等学校の「特色ある学科・コース」における教育の特色化と生徒」『筑波大学教育学系論集 第24巻 第2号』、pp.33-48.
- (11) 学校組織は少数の管理職以外の権限・責任が基本的に同等で、横一線に並んでいると見られ、「なべぶた」型という比喩で表現されることが多い。
- (12) K高校の進路指導は1人の教師が数名の3年生のチューターとなり、クラスの枠を越えて進路選択や受験に向けた指導を丁寧に行っている。